

# 令和2年度荒川区登録有形文化財(歴史資料)

・名称：<sup>けんさいおちぼづか</sup>妍齋落齒塚<sup>ひ</sup>の碑

・所有者：西日暮里三丁目 養福寺

## 年代

寛政9年(1797)10月

## 建立者

島得器(号方円庵)

## 員数

1基

## 法量

本体：高さ	117.6 cm	台石：高さ	21.0 cm
幅	39.5 cm	幅	114.0 cm
奥行	24.0 cm	奥行	58.0 cm



## 概要

江戸談林派の俳人、島津富<sup>しましんぶ</sup>(号妍齋<sup>けんさい</sup>)の齒を埋納した塚の石碑。門人の島得器<sup>しまとくき</sup>が建立。硯<sup>すずり</sup>を模した台座に据えられている。

寛政10年、津富の百ヶ日の追善のために得器が出版した「<sup>はいかいつかののち</sup>誹諧塚乃後」によると、津富は中年の頃から取り置いていた齒を埋めて塚を築くことを望み、遺体は郊外で<sup>だび</sup>荼毘に付し散骨するよう、かねてより門弟たちに託していたという。その念願を遂げるため、得器が津富の落齒を談林派の祖西山宗因<sup>にしやまそういん</sup>の梅翁花尊碑の傍らに埋め塚を築いて、碑を建立し、津富を供養した。後年、総門を入れて左の植え込みに移されたと推定される。

制作年代、建立者及びその背景が明らかであり、地域の歴史・文化を知る上で、また江戸談林派の活動の一端を知る上で貴重である。

## 銘文

左側面	正面	右側面
<p>寛政九年丁巳十月</p> <p>門人 方圓菴得器</p> <p>建之</p>	<p>妍齋落齒塚</p>	<p>空にかへすものは時をまち<small>(返)</small> <small>(待)</small></p> <p>地にかへすもの先ひとつ<small>(返)</small></p> <p>ひろひよせて<small>(拾)</small> <small>(寄)</small> 埋むおちはや<small>(落)</small> <small>(葉)</small> 風の壳<small>(殻)</small> 津富</p>

## 島津富について

談林派の俳人。号は妍齋。撰津国富田(大阪府高槻市)生まれ。初め小菅蒼狐こすげそうこの門に入り、蒼狐没後は同門の谷素外の門人となった。江戸談林派の四宗匠の一人で、主な門人に島得器、浮世絵師の勝川春章らがいる。

寛政4年(1792)、西山宗因百回忌を前に、素外の追善事業案を西山家に諮り、養福寺に梅翁花樽碑等を建てた。安永10年(1781)の「梅翁百年香」ばいおうひゃくねんこうの編纂、寛政8年の鎌倉鶴岡碑(鎌倉杉ヶ谷弁財天)や同10年の磬石の碑(養福寺)しきいしの建立に関わるなど、素外とともに宗因顕彰に尽力した。

寛政9年12月21日没。素外の計らいにより今戸の慶養寺(台東区今戸一丁目)に埋葬された。編著に「俳諧句鑿拾遺」はいかいくかんしゅうい(寛政6年)がある。

## 島得器について

島得器。ほうえんあん方圓庵と号す。島津富の門人。点取俳諧の点者として知られ、機に応じて即座に機転を利かせる滑稽の才能があると評された。津富没後、門人数人を抱え、津富百ヶ日追善を主導し、寛政10年「誹諧塚乃後」を刊行した。得器七回忌の際、門人が「閑子鳥の碑」を日ぐらしの里(養福寺内カ)に建てる計画があったが、障りがあるとして「隅田の里」に移されたという。長谷川町(中央区日本橋堀留町二丁目)に住したが、火災にあって神田お玉ヶ池たにそがいの谷素外の下に一時寓居していたという。